

和歌山市まちなか再生計画

2030わかやま・まちのちから塾
セミナー&セッションおよびワークショップ
市民のちからのまとめ

変わらなかったらチャンスが無い
出来ない理由に立ち止まらず
出来る方法に知恵を出そう
2030年、
夢ではなくて目標としてその姿を描きすすもう

(株)タフ・コーポレーション

目次

■ 自分たちのまちは自分たちで！	まちのちから塾 ワークショップでの提案	3
■ このままでいいのか？	現状認識・問題提起	4
■ 「2030わかやま」を描く	目指すべき理想の姿	6
■ 市民の知恵を掘り起こす	5班の提案	9
くらしのかたち・まちのかたち →動く力(2030わかやま構想)		
1) 歩行者のまち		11
2) コンパクトシティ・都市機能の集積		15
3) 交通機関・LRT		18
生涯かけての暮らしやすさ →繋ぐ力(2030わかやま構想)		
4) 高齢者・障がい者・子ども・子育て世代		21
5) 医療・福祉		24
6) 食の豊かさ		27
創造力 学びはまちづくり・まつりはまちづくり →学ぶ力(2030わかやま構想)		
7) 教育		30
8) 芸術文化		34
にぎわい・もうかるまちのアイデア →商う力(2030わかやま構想)		
9) 広場・公園・パブリックスペース		37
10) 商業等産業機会		45

■自分たちのまちは自分たちで！ まちのちから塾 ワークショップでの提案

本報告書ではワークショップ参加の五班から提案されたまちづくりのハードや、ハード整備に絡むソフト提案に関する施策について、補足説明や先例を盛り込みながら紹介する。まず、各班の問題提起、掲げる理想、そしてそれに対して発案された提案を読み解き、類似の背景をもつ提案をまとめて分類を試みた。

その結果、

- ◇「まちのかたち」 まち全体の構成や繋がり、ハードの部品に関してあるべき姿
- ◇「暮らしやすさ」 生活、健康、食の豊かさ、持続可能な高齢社会を担保する価値観
- ◇「文化・教育」 子どもや大人の知的欲求に応え、暮らしに付加価値をもたらす施策
- ◇「にぎわいとビジネス機会」 人が集う場所・仕掛けと集いの周辺の商業機会

の四つのカテゴリーに大きく分けられることが分かった。市民や市役所職員有志の提案であり、これが和歌山に必要な事項を網羅的に挙げているのか、普遍的な視点での提案となっているのか、さらにカテゴリーやサブカテゴリーの分類の度合いが適切であるかは別の場での評価を待たざるを得ない。しかし複数のグループの提案が提示のような項目に収斂したという事は、これらのカテゴリーを重点的に掘り下げると、市民の目から見た和歌山の問題点が見えてくるであろうと言えるのではないかと考える。

くらしのかたち・まちのかたち

- 1) 歩行者のまち
- 2) コンパクトシティ・都市機能の集積
- 3) 交通機関・LRT

生涯かけての暮らしやすさ

- 4) 高齢者・障がい者・子ども・子育て世代
- 5) 医療・福祉
- 6) 食の豊かさ

創造力 学びはまちづくり・まつりはまちづくり

- 7) 教育
- 8) 芸術文化

にぎわい・もうかるまちのアイデア

- 9) 広場・公園・パブリックスペース
- 10) 商業等産業

■このままでいいのか？！ 現状認識・問題提起

ワークショップに参加した五つの班はどこもまず和歌山の現状を憂い、2030年に向けてまちを良くしていくためには何が必要かという考察を行った。まちが衰退しているという一般的な認識を出発点に、その問題点を洗い出し、理想的な状況を想定したうえで、具体的な処方方を考えた。

車中心のまちの構造

和歌山が住みにくくなっている一つの状況として挙げられたのは、郊外化とそれに伴う車中心の生活パターンである。人々の移動方式が変わることで、まちの構造も変化してきたが、その構造の持つ矛盾点が人口構成や経済状況の変化によって顕在化してきたともいえるであろう。

A班は「誰のための道ですか」との問いかけを通じて、「自動車中心のまちから歩行者のまちにしよう」と呼びかけた。まちが拡大し続け、車社会となって、郊外の一戸建てが増加。しかし少子高齢化や、活動世代の大都市への流出によって経済活動量が低下し、移動需要の減少や税収減少によって公共交通機関の乗車率低下やさらには減便・廃線など、車社会に対応した街の構造が出来てしまったのに、その車社会を持続させることが出来なくなった社会が直面する矛盾によって暮らしにくいコミュニティとなってきた。

しかし、B班は、2030年には自動車保有者が減少し、交通量もそれに比例して減少するのであるから、道路敷地を他の用途に転用することが出来るのではないかとポジティブな捉え方をしている。これについては、特にけやき大通りについての提案が多く出された。

人口減少

2007年に、国全体の人口が減少に転じてから、ほとんどの地方都市がこの問題を抱えるようになってきた。C班によると、2005年に37.5万人いた和歌山市の人口が、2035年には27万人になると見込まれる。さらに生産年齢人口割合は2010年に61.4%あったものが2035年には53.8%となり、生産人口減少によって地域の産業の絶対量も減少し、地方自治体の税収も大きく下落することが予想されている。

しかし、時間軸で見ると、これまでの地価高騰による若い世代の都心部から郊外への転出、そして結果としての市域拡大は、産業や税収が縮小傾向に入ったからといってすぐに逆転するわけでもなく、市の中心部の人口密度はより一層低下して、空き家、空き店舗、空地（駐車場）が、まちの景観の大きな部分を占める事態となってきた。中心部の衰退はこのような複合的な理由によるものであるが、まちとしての体裁、賑わい、生活の場としての利便性や愛着の度合いにマイナスの効果があることは想像に難くない。

都市の魅力はまさに「集積と密度」にあるとすれば、広がる市域と減少する人口、そして減少する税収は、都市を都市でないものにしているようなものであると言える。

中心部の衰退

上記のように拡散と低密度の組合せにより、都市の魅力が低下して、中心部が本来の都市の魅力を維持できず、衰退してきたことは自然な流れではある。しかしそれでもまだ約37万人が暮らす都市である和歌山の中心部は、戦略的に密度を取り戻すことが出来れば、再活性化するのではないだろうか。C班はこのような考え方で、「和歌山市中心市街地活性化基本計画」からアンケートの結果を引用している。

和歌山市全体としてどのようなまちの将来像を描くかとの問いに対して、大阪のベッドタウン、幹線道路で構成された地方の中心都市などという選択肢の中で、約8割の和歌山市の住民は「中心部に核となるまちなかがあり、周辺に観光拠点等のある」まちを望むとの結果が出ている。つまり高齢者や一部個人の意見ではなく、市民全体の共通認識として、中心部のしっかりしたまちなかが必要であるとされているのである。

さらに中心部のまちとして重要な点はこの問いでは、5割近くの人が、「商業の中心として郊外店に無い魅力的なお店があり機能が充実して賑わっているまち」を挙げている。（以下、魅力的なまちなみ、城下町としての歴史・文化・伝統、道路・公園の整備と子どもや高齢者対応、コンパクトにすべてがそろう、等の項目が続いている。）

C班は、中心部の商業的な成功の重要性に注目して、まず駅前を活性化し、その後に中心部に人の流れを導くという計画を提案している。

E班は、コミュニティの絆が消えたことでまちづくりの機運が高まらないのではないかとこのころに着眼している。またライフスタイルの変化、購買行動の変化についていけないが、やはりいいものを持っている伝統的な工芸の技術が苦戦している状況を見て、なにか効果的な支援策が無いかという危機感を提示している。



（和歌山城）

■「2030わかやま」を描く 目指すべき理想の姿

各班が和歌山の問題点を洗い出した後、それではどのようなまちを目指すのかと、理想像に想いを馳せると、いくつかのアイデアが挙げられたが、それは、いくつかの共通項に分類することが出来る。

- ◇「まちのかたち」 まち全体の構成や繋がり、ハードの部品に関してあるべき姿
- ◇「暮らしやすさ」 生活、健康、食の豊かさ、持続可能な高齢社会を担保する価値観
- ◇「文化・教育」 子どもや大人の知的欲求に応え、暮らしに付加価値をもたらす施策
- ◇「にぎわいとビジネス機会」 人が集う場所・仕掛けと集いの周辺の商業機会

住民が「理想」に挙げている項目は、和歌山に「不足」と感じているものであり、「まちに足りない」と思うところは、すなわち「まちに期待する」ことでもあり、まちがまちとして評価されるために最低限必要な事項であるとも言えるかもしれない。

自分たちが住みやすい、住みたいと思えるまちになると、まちに対する誇りが生まれ、そのライフスタイルを垣間見る又は体験するために観光客が訪れ、移住を考える人も出てくる。色々な施策・提案は、まちの魅力を高めるためのものであり、今後事業化をする場合には、この大きな目標を見失わないように、大局的な議論と判断を期待する。

くらしのかたち・まちのかたち

B班が言及しているように、交通手段を持たない住民でも歩ける範囲で日常生活が充足できるように各種サービス、医療福祉施設およびその他の都市機能が集積し、ハンディキャップのある方を含むすべての人々が安全に歩きやすいバリアフリー設計の歩行者空間を確保した歩行者中心の構造のまちになることが理想的である。

さらに、機能性だけではなく、歩くことが楽しくなるようなまちの仕掛け、景観、環境などを織り込むことも歩行者中心のまちづくりとしては重要とされる。B班は食べ歩き、飲み歩き、そぞろ歩きを楽しめるまちをビジョンのひとつとして挙げている。C班は多くの観光客が歩くまちとして表現をした。

また、JR和歌山駅と南海和歌山市駅の2つの駅と、その両方から離れた位置のぶらくり丁の存在により、まちの中心といえる場所が薄く分散している和歌山の構成に対処するために、LRTなど、交通機関の再整備を行って、まちなかの往来を容易にする工夫も必要と考えられている(B班) せっかく、世界へひとつ飛び(B班) 出来る位置に関西国際空港がありながら、自分たちのまちなかを移動するのに不便をこうむっている状況を改善することが出来れば、まちなか再生の大きな一助となると思われる。

生涯かけての暮らしやすさ

まちににぎわいを取り戻し、流出する人口を少しでも抑制するためには、和歌山はとても暮らしやすいまちだという認識を持ってもらうことが大変効果があるであろう。

高齢者、子育て世代、そして子どもたちにとって暮らしやすいまち(A班、B班)は特に理想に挙げられる。その内容はバリアフリーのまちであったり、医療福祉施設のレベルが高く量も充実していることであったり(B班)する。予防医学を重視した取り組み(E班)も、健康維持には有効であろう。

さらに健康都市としてメディカルモールの整備(A班)、高齢者対応高層住宅の駅前など中心街での配置(A班)、おいしい食材や緑の豊かなまちなみで心豊かに暮らせる環境(B班)、豊かな住環境(C班)など暮らしやすさに関する理想像の検討が見られた。

創造力 学びはまちづくり・まっしはまちづくり

特に若い世代が新しい家庭を築く時期に住まいを定める際には、子どもの教育を考慮することがよくある。そのため、コミュニティとして教育に熱心であるとか良い学校があるなどの評判は、まちの世代交代を促し、高齢化を緩和するためにも有効であると考えられる。和歌山では就学年齢児童数の減少に伴い小中学校の統廃合が行われているため、それを機会に子どもの教育に配慮したまちづくり(A班)が考えられる。

教育に熱心なコミュニティということは、子どもに注意を向けるコミュニティでもあり、上記の子どもにとって、また子育て世代にとって暮らしやすいまちにもつながると思われる。

教育の観点は、子ども向けだけにはとどまらず、大人も生涯学び続けることで豊かな生活につなげることが出来る。C班は、まちなかに人を流す仕掛けのひとつとして、「学び」をとりあげ、市民の知恵や経験、主張をオープンな場で学べるようにしたいと提案し、A班も同様に生涯教育の充実、工芸品のクリエイターを迎えたものづくり学校の設立を理想として挙げている。

教育的な活動や仕掛けは、言葉を代えれば文化的生活につながる。心豊かな生活(B班)のためには、芸術文化やイベントも大きな比重を持つであろう。また伝統的なクラフト、工房の集積を図って地場産業の振興(E班)を狙うこともできるとまちの特色づくりに役立つ。

にぎわい・もうかるまちのアイデア

一般的な「にぎわい」は、当然まちの理想像に入るが、その仕掛けとしての緑地やイベントスペースが有効に機能すること(B班)、そのために、これまでとは異なる位置づけの市民公園の整備など(E班)、ハード面での賑わいづくり支援も不足しているとの認識があるようである。D班は、さらに大きな面で賑わいを捉えて、人を動かす仕掛けを集積させた「大和歌山城構想」を目指したいとしている。同様にC班は活気のある商業を目指すために2つの駅前や新地(アロチ)地区に注目している。

人が集まる場所を作ることによってビジネス機会の増加を期待するだけでなく、積極的に地場産業を盛り上げて、デザインの質などを向上させて全国的なレベルにという、ものづくり学校(A班)や工房村(E班)のような仕掛け、また二つの駅前にまず商業施設の集積を進めるべきという提案(C班)もあった。

「おらがまち」誇りを持てるまちづくりを目指す

E班の調査によると、自らの県に対しての愛着度ランキングでは、和歌山県は第38位で、64%の住民は自分の県に愛着を感じていないそうだ。同様に自慢できるもののランキングでも43位で、85%の人は、和歌山県を自慢できないと考えている。このように、住民がふるさとを誇りに思えない状況は、まちづくりの観点からは危機的な状況であるが、それを反転させるためには、総合的複合的な改善が必要であろう。しかし、それもひとつひとつの行動の結果の積み重ねであり、行動を起こさないという選択は無いのであろう。

ふるさとを誇りに思うまちを目指す(E班)、郊外から移り住みたくなる(A班)、わかやまの玄関として誇れるまち(B班)、ビジネス客や観光客が、「あっ、このまち良いな」と感じるまち、住みたいまち(E班)など、総合的に誇りを感じられるまちを目指していこうという熱意について各班とも発表内容で表現している。住民が誇りに思っているまちには、外の人々も魅力を見出して訪問してくれる。観光客を呼び込み経済活性化につなげるには、すぐに陳腐化して飽きられる観光施設よりも、また入場料収入と安価な土産物売り上げにしかない名

所名跡よりも、自分のまちや自分のまちのライフスタイルを誇りに思い、エンジョイしている住民がいるまちを訪れてもらい、宿泊し、食事をし、地場の食材や工芸品、美術品を購入してもらって、その良さを口コミで伝えていただくことが一番の持続的な繁栄の方程式だといえる。



■市民の知恵を掘り起こす 5班の提案

ここからは、ワークショップの結果として5班のメンバーが調査し、検討し、考えて提示した各種の提案を示す。ゆるやかに四つのカテゴリーに分類をすることが出来る、合計10通りの提案項目が示された。本報告書内のページ番号を右側に記載している。

くらしのかたち・まちのかたち

1) 歩行者のまち -----	11
a) プロムナード・歩道の拡張と憩いの空間(A班)	12
b) プロムナード・市堀川遊歩道と歩道の接続(A班)	13
c) 楽しく歩ける仕掛け(C班D班)	14
2) コンパクトシティ・都市機能の集積 -----	15
a) コンパクトシティ形成の地域分け(A班)	16
b) 異なる性格の機能集積(B班)	17
3) 交通機関・LRT -----	18
a) LRT採用による交通利便性の整備(B班)	19
b) 空中自転車通行ゾーンの設置(B班)	20
c) 自転車専用道の設置(A班)	20

生涯かけての暮らしやすさ

4) 高齢者・障がい者・子ども・子育て世代 -----	21
a) バリアフリーのまちの構造を実現(A班・B班)	22
b) 高層高齢者住宅をぶらくり丁と美園に(A班)	23
5) 医療・福祉 -----	24
a) メディカルモールの設置	
b) 歩いていける範囲に高いレベルの医療・福祉施設を配置する(A班・B班) ..	25
c) 予防医学と安心医療都市宣言(E班)	26
6) 食の豊かさ -----	27
a) 地元の海山川の幸の集積(B班)	28
b) 地産地消都市宣言を通じた「地産地消教育体制の構築」(E班)	29

創造力 学びはまちづくり・まつりはまちづくり

7) 教育 -----	30
a) 教育機会の充実(A班)	31
b) ものづくり学校(A班)	32
c) 中心部へひとを流す仕掛けとしての「学び」(C班)	33
8) 芸術文化 -----	34

a) 芸術文化施設・緑地・イベントスペース・オープンカフェ(B班D班)	35
b) アトリエ・作業場の集積(C班)	36

にぎわい・もうかるまちのアイデア

9) 広場・公園・パブリックスペース	37
a) プロムナード・歩道の拡張と憩いの空間(A班)	38
b) 緑地・イベントスペース・オープンカフェ(B班)	39
c) けやき大通りを緑のオアシスに(B班)	40
d) 市堀川周辺を親水型空間に(C班)	41
e) 和歌山城に隣接する憩いの中心の形成(E班)	42
f) 公園を核としたまちづくり(E班)	43
10) 商業等産業	45
a) ものづくり学校で地元の食材・素材による独自の商品開発(A班)	46
b) アトリエ・作業場の集積(C班)	46
c) まちなかの地場産業工房村(E班)	46
d) 駅前特区 - 2つの鉄道駅前に人を集める(C班)	47
e) 駅前発ぶらくり構想 - 駅前から中心街に人を流す(C班)	48
f) 市民出店用スペースの設置 - 大和歌山城構想(D班)	49
g) けやき大通りの整備 - 副路側帯の活用と利用(E班)	50
h) 市民公園周辺の商業(E班)	51

くらしのかたち・まちのかたち - 1) 歩行者のまち 

くらしのかたち・まちのかたち - 1) 歩行者のまち

a) プロムナードー歩道の拡張と憩いの空間(A班)

背景

自動車の普及とそれに伴う車道の整備により、車による移動に依存したまちの構造が出来てきて、密度の高いまちなかよりも、道路が広く駐車場が安い郊外のコミュニティが発達してきた。加えて人口の高齢化(労働人口の減少)による税収の低下など、公共交通機関の採算性・持続可能性が低下し、減便や廃線となる事例も出ている。

郊外に拡散した人口が高齢を迎え、自家用車を持たない又は運転できない世帯が増えつつある今、市の政策としては、住民には郊外からまちなかに移り住んでもらい、歩いて用が足せるようなコミュニティを形成することである。

提案

歩道の品質を高めるために、可能な場所では車道を歩道や自動車道に転用する。広くした歩道上には、立ち止まれる憩いの空間を作る。さらにアート作品や、歴史的な事項の説明案内板などを用いて、通行する際の付加価値の提供を図る。

事例

広くした歩道上のベンチ、テーブル、テーマ性のある彫刻など、管理が行き届いていればまちのアメニティとして機能し、人々が足を止め、にぎわいが生まれ、行く人とどまる人とのゆるやかなコミュニケーションが発生することで、まちに対する愛着につながる。



くらしのかたち・まちのかたち - 1) 歩行者のまち

b) プロムナードー市堀川遊歩道と歩道の接続(A班)

背景

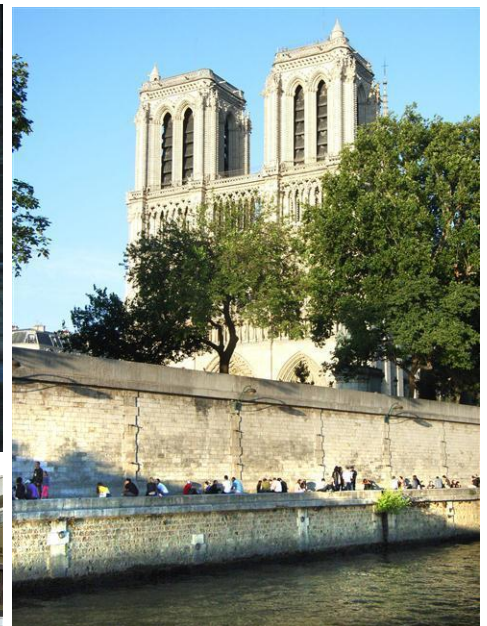
市堀川沿いに遊歩道が整備されているが、あまり利用されていない。遊歩道自体がストリートレベルから一段下がったレベルに設定されていることに加え、川沿いのほぼすべての建物は、川は裏側という設定で設計されていることが、せっきくの遊歩道の利用をためらわせる原因となっている。公衆の目が届かないため、防犯上の懸念もある。

提案

この遊歩道を積極的に活用するため、歩道との接続の度合いを高め、歩行者専用道路として利用者を増やす。可能であれば自転車道を設置したり遊歩道側に顔を向けた店舗・飲食店の設置も行う。

事例

写真左下は市堀川にかかる本町通りの京橋の脇にあるバーの店頭にあった一組のテーブルとイス。パリ中央部に流れるセーヌ川は、河岸の低い位置に連続したスペースがあり、車交通の騒音から切り離された独特の雰囲気のある憩いの場となっている。



くらしのかたち・まちのかたち - 1) 歩行者のまち

c) 楽しく歩ける仕掛け(C班D班)

背景

まちなかを歩く際により積極的に楽しい環境を整備し、景観の品質向上につなげる。道路や歩道を、通行のための場所と捉えるのではなく、時間を過ごす市民のための場所と考える発想の転換となる。

提案

市駅前の道路の車線を削減し桜並木を植えてまちの顔としてふさわしい体裁にする



内川沿いにイベントおよびにぎわいブースを展開。ウォーターフロントの楽しさと回遊性を作り出す



ストリートファニチャーの整備を行う など



まちなかウォークラリーや皆遊(回遊)企画、街路樹および桜の木のオーナー制度など
大通り、遊歩道、城など公園を巡るたのしさをソフトで提供

くらしのかたち・まちのかたち - 2) コンパクトシティ・都市機能の集積 →

くらしのかたち・まちのかたち - 2) コンパクトシティ・都市機能の集積

a) コンパクトシティ形成の地域分け(A班)

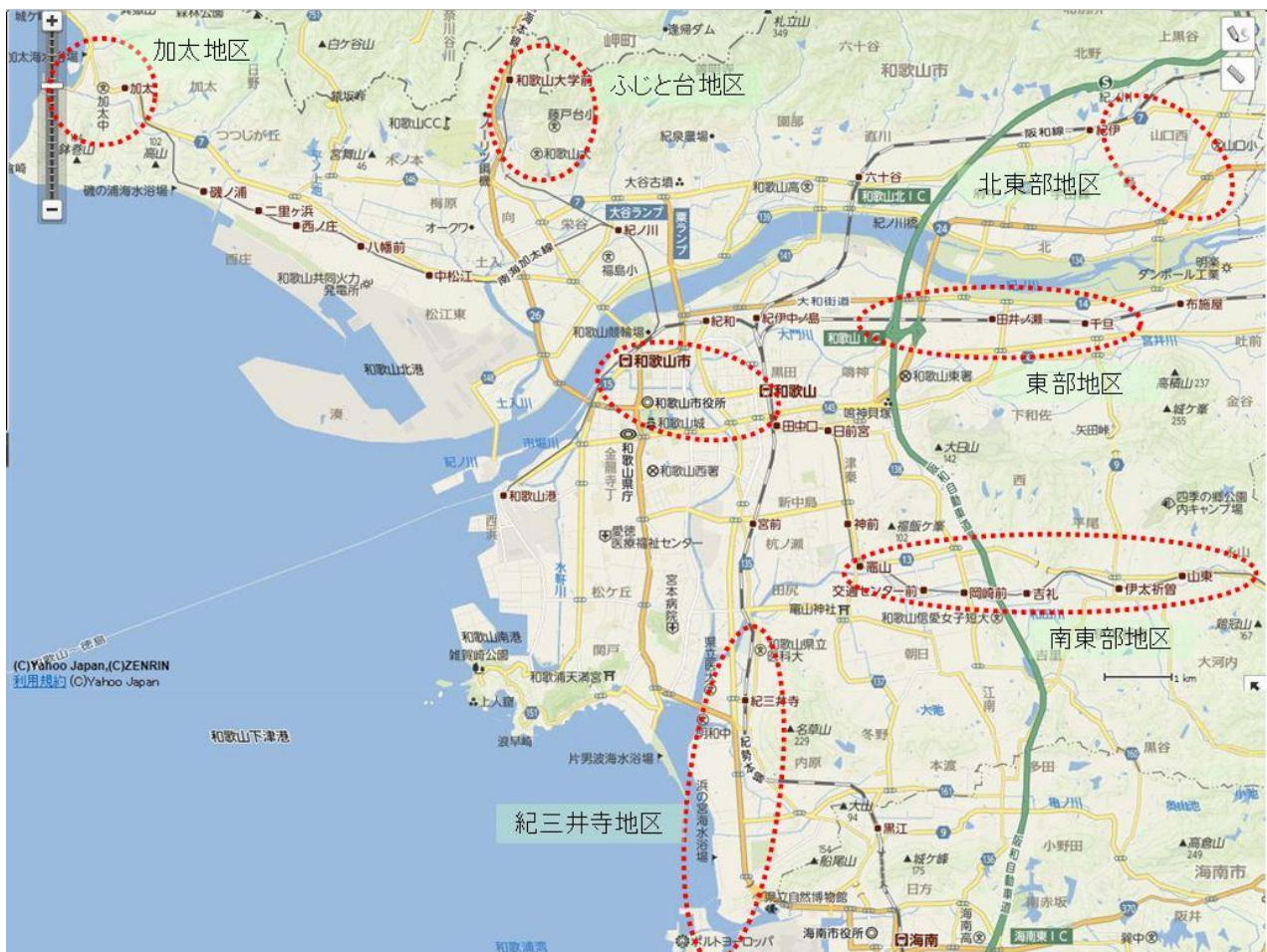
背景

まちをこれ以上広げずに集約する、コンパクトシティの考え方は必要であるが、現状すでに拡大した市域に対処するうえで、数か所のコンパクトシティを作る必要がある。

提案

既存の産業や人口の集積を基に、いくつかの地域を設定して、コンパクトシティ化を推し進める。それぞれの地域間の競争によって、投資を促す。

- 和歌山城周辺: 伏虎中学周辺
- 紀三井寺方面(紀勢本線): 医大病院、紀三井寺、和歌浦、マリーナシティ
- ふじと台地区(南海本線): 大阪側の玄関、新興都市、大学、大型SC
- 北東部(阪和線): 大阪の通勤圏、既成市街地、川辺の商業集積
- 東部(和歌山線): 国道24号と阪和高速、流通利便性、軽工業地域
- 南東部(貴志川線): 伊太祁曾神社、竈山神社、熊野古道、農産物果樹園
- 加太(南海加太線): 海、山、友ヶ島、海水浴場、森林公園、漁港、海産直売



くらしのかたち・まちのかたち - 2) コンパクトシティ・都市機能の集積

b) 異なる性格の機能集積(B班)

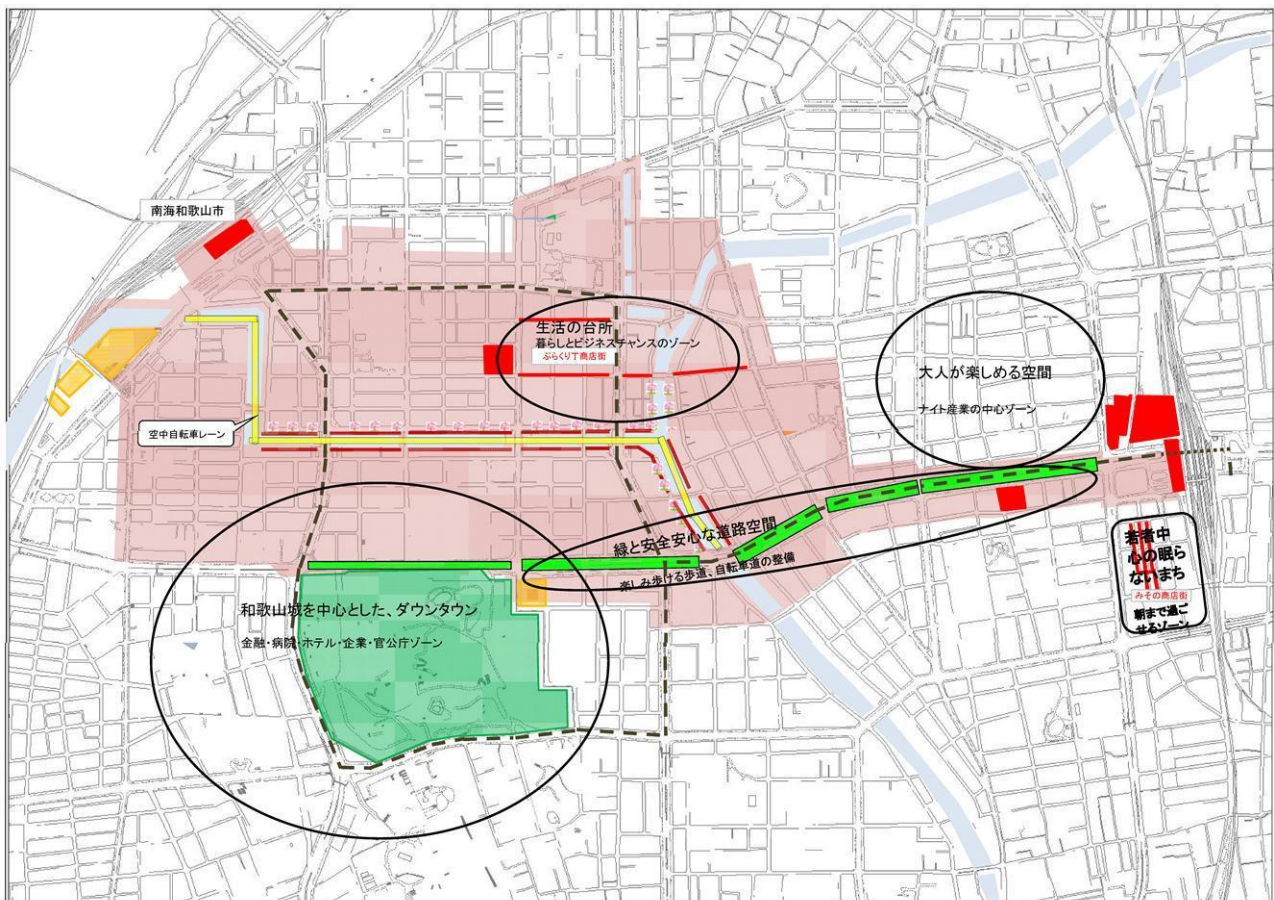
背景

都市活動の密度を高めて効率的なまちにする観点から見ると、地区ごとの特徴が若干あるが明確でない。

提案

既存のまちの特徴をさらに顕在化して、めりはりのある中心地の整備を行い、各種サービス機能の集積を図る。

- 「生活の台所」(暮らしとビジネスチャンスのゾーン)⇒ぶらくり丁
- 「大人が楽しめる空間」(ナイト産業の中心ゾーン)⇒JR和歌山駅から新内
- 「若者中心の眠らないまち」(朝まで過ごせるゾーン)⇒美園商店街
- 「和歌山城を中心としたダウンタウン」(金融・病院・ホテル・企業・官公庁ゾーン)⇒和歌山城周辺
- 「緑と安全安心の道路空間」(楽しみ歩ける歩道と自転車道の整備)⇒けやき大通り



くらしのかたち・まちのかたち - 3) 交通機関・LRT 

くらしのかたち・まちのかたち - 3) 交通機関・LRT

a) LRT採用による交通利便性の整備(B班)

背景

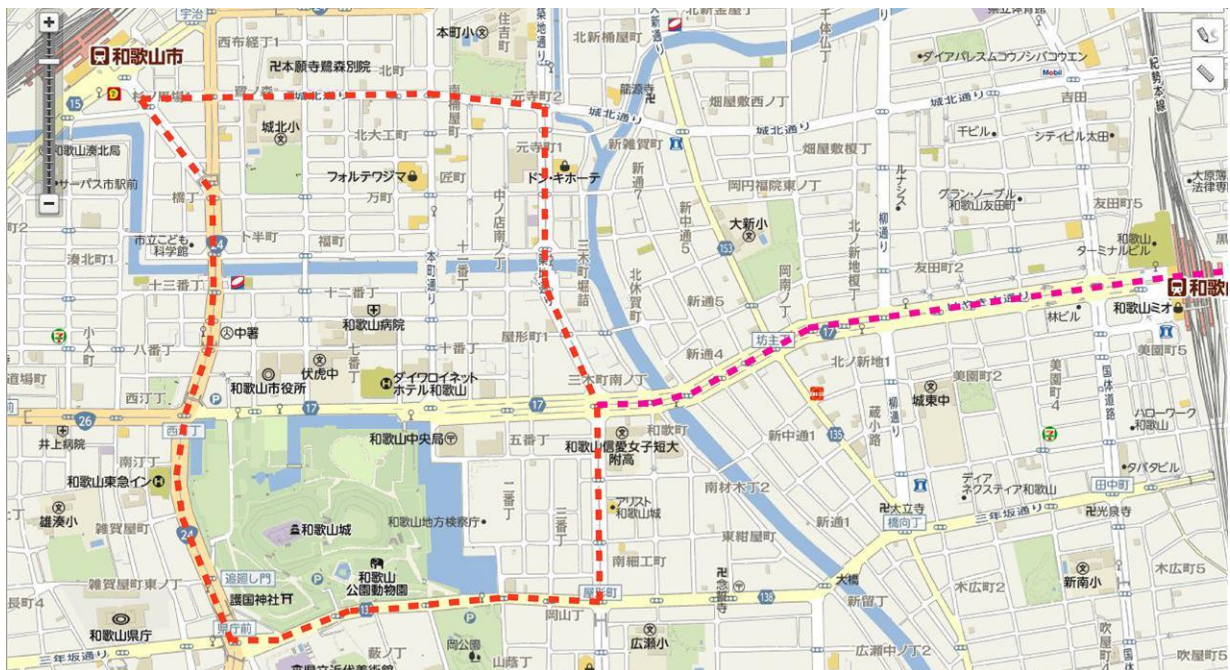
和歌山は二つの鉄道駅を東西の端に持ち、城周辺の官庁金融街と、ぶらくり丁という商業の中心地があってまちの中心が分散した構造である。郊外から中心街に出てくる人は、複数の用事を済ますためには、自家用車で来街したほうが便利である。歩いて生活できるまちにするためには、中心地内での往来が容易になるような、公共交通機関の設置が必要である。

提案

LRT(路面電車)を、和歌山城・ぶらくり丁、南海和歌山市駅を循環させ、さらにJR和歌山駅とそのループをつなぐ路線に設置する。(路線図下記参照)

備考

LRTは自動車利用の需要を低減させてエコロジカルであり、専用線であれば渋滞に影響されずに定時運航が可能、さらに乗客一人あたりの運用コストがバスよりも安価な交通手段として脚光を浴びている。しかし初期投資が大きいため、需要調査や資金計画をおろそかにすると財政に過大な負担がかかる恐れがある。もともと交通量が少ない都市であれば渋滞回避のメリットも少ないため、近い将来には電池バスなどの運行の方が利点が多くなる可能性もある。



くらしのかたち・まちのかたち - 3) 交通機関・LRT

- b) 空中自転車通行ゾーンの設置(B班)
- c) 自転車専用道の設置(A班)

背景

これまでの都市の構造は車優先のつくりであった。歩いて用が足せるまちの考えを補完するものとして、自転車の安全な活用が図れるまちづくりを行いたい。

提案

自転車で回ることが楽しいまちとして、安全で安心して走れる自転車専用道を設置

- 市民会館近くの北大通りから入り、三木町でけやき大通りに至るまで、市堀川上空に架構した専用空中道を走る
- 市を周回するコースを複数、および通学路に自転車専用コースを設置



生涯かけての暮らしやすさ - 4) 高齢者・障がい者・子ども・子育て世代—————▶

生涯かけての暮らしやすさ - 4) 高齢者・障がい者・子ども・子育て世代

a) バリアフリーのまちの構造を実現(A班・B班)

背景

日本のほとんどのまちは車優先、健常者優先でデザインされている。しかし高齢社会が広がる現代、高齢者や障がい者、ベビーカーなど、すべての人のモビリティを容易にする気遣いをデザインに組み込むユニバーサルデザインという価値観が広まっている。

提案

できるところからバリアフリーに対応していく。

事例

アメリカでは法律によって公共の場所は全て車いす対応(車いす利用者が一人で移動できる)にしなければならない。(インターホンで係員を呼んでくださいというのは不可)。

住宅内部も対応することが奨励され、固定資産税の優遇を受けられる場合がある。



生涯かけての暮らしやすさ - 4) 高齢者・障がい者・子ども・子育て世代

b) 高層高齢者住宅をぶらくり丁と美園に(A班)

背景

コンパクトシティとは郊外居住者が中心部に住みたくするようにする事であるとすれば、良質の住宅を供給することが求められる。交通便利なJR和歌山駅前と、かつての商業の中心地ぶらくり丁に住宅の整備を行う。

提案

美園地区に高層の高齢者住宅を整備する。地下駐車場、1階飲食物販テナント、2階医療機関、3階フィットネスや交流スペース、4階以上を分譲・賃貸住宅とし、バリアフリーや宅配サービスを完備させる。

ぶらくり丁では、公園を囲むように高層住宅を整備する。1-2階はテナントスペースとし、高齢者にも魅力的な公園を備えた居住空間を作る。



生涯かけての暮らしやすさ - 5) 医療・福祉 →

生涯かけての暮らしやすさ - 5) 医療・福祉

- a) メディカルモールの設置(A班)
- b) 歩いて行ける範囲に高いレベルの医療・福祉施設を配置する(B班)

背景

まちの魅力のひとつに医療や福祉体制の充実が挙げられる。特に日本赤十字社和歌山医療センターの存在もあり、まちなかの医療・福祉施設のアクセスの良さや先端医療施設の完備、さらに予防医学や健康づくり施設によって、安心して健康に暮らせるまちにつなげたい。

提案

歩いて行ける範囲、つまり、コンパクトシティの単位ごとに充実したメディカルモールや医療・福祉施設があり、容易にアクセスできるように配置する。

- 小児科・産婦人科
- 漢方、予防医学
- 介護福祉施設
- 湯治施設
- 健康づくり
- 最先端医療



生涯かけての暮らしやすさ - 5) 医療・福祉

c) 予防医学と安心医療都市宣言(E班)

背景

緊急医療体制は、日赤、和歌山医大、労災病院など充実しているが、予防医学はそれほどでもない。医療費の低減、そして健康的な生活の基盤となる予防医学に視点を変えるべき。

提案

予防医学&安心医療都市宣言を採択し、メンタルヘルス医療体制を含む体制の整備により、他府県から和歌山市への保養が増え、観光以外にも来街者による地元消費が活性化させる。市が医療機関と提携して、予防医学の啓発、移動教室などを進める。

- 予防医学の積極的な取り組み
- メンタルヘルス医療体制の整備
- 再開発の一環としてまちなか医療体制先進地域としての体制を整備



生涯かけての暮らしやすさ - 6) 食の豊かさ →

生涯かけての暮らしやすさ - 6) 食の豊かさ

a) 地元の海山川の幸の集積(B班)

背景

地元産の農産物や海産物は、大量消費地に送られ、地元で味わえる機会が少ない。しかし、地元のブランディングの一助として、名産品に注目し、ここに来なければ味わえないという産物が欲しい。

提案

ゆったりと心豊かに暮らせるまちとして、海の幸、山の幸、川の幸を集積させ、産地と同じ鮮度で味わえるように流通や飲食店を整備する。



生涯かけての暮らしやすさ - 6) 食の豊かさ

b) 地産地消都市宣言を通じた「地産地消教育体制の構築」(E班)

背景

海産物、農産物の宝庫である和歌山で、その素晴らしさを実感することで、質の高い暮らしを実現し、ふるさとを誇りに思う郷土愛を高める。そのための地産地消教育を支援すべき。

提案

地場産の食材に対する意識の向上を図る施策を導入する

- 食育講座に対する市の後援
- 放送やWeb配信、学校でのパンフ配布など、既存のモデルを活用
- 学校給食を通じた食育を行う
- 公園の一角に「産直生鮮三品店」を設置し、トレーサビリティの確実な食材を供給する



創造力 学びはまちづくり・まっしはまちづくり - 7) 教育 →

創造力 学びはまちづくり・まっつりはまちづくり - 7) 教育

a) 教育機会の充実(A班)

背景

人々が住む場所を定める際に参考にすることのひとつが子どものための教育環境である。中心地人口減少に伴い小中学校の統廃合を進めているが、新たな仕組みを作る機会でもあり、小中一貫校の整備が計画されている。また豊かな生活の一助として、大人も学問や趣味、運動や健康法の一環としての知識・技能の習得が挙げられる。この充実を図ることで、定住人口を維持または増加させる。

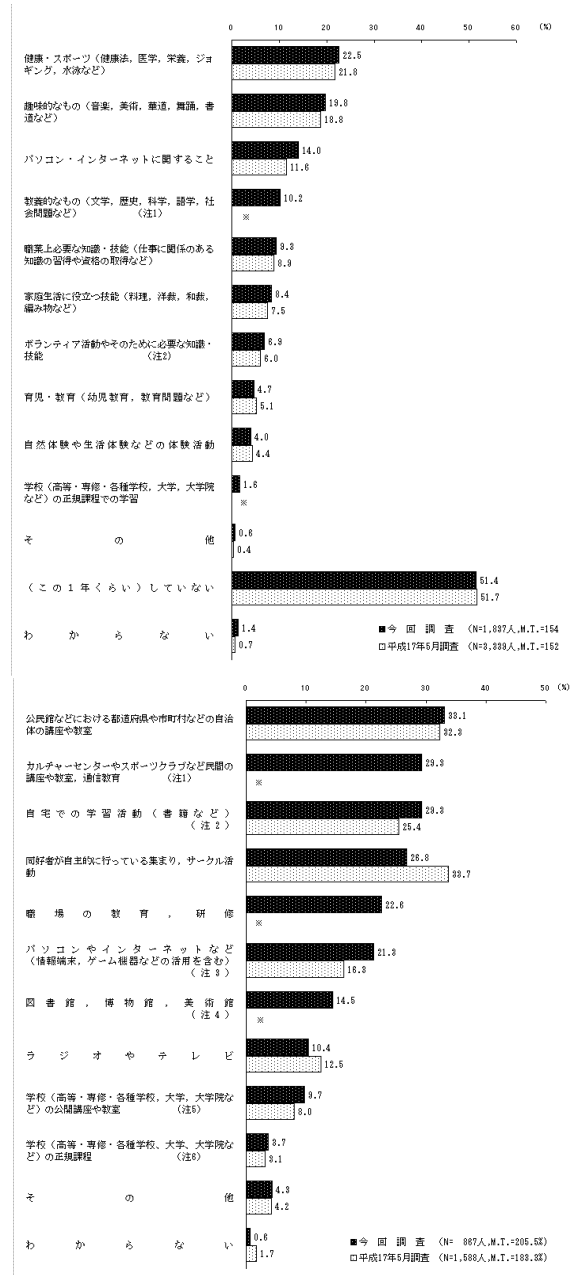
提案

小中一貫校はレベルの高い学校を目指す。医療・福祉専門学校を設置して同業界の人材育成を図る。塾や習い事、生涯教育などを提供する施設が運営しやすいような環境を整える。

資料：内閣府生涯教育に関する調査（平成20年）

健康・スポーツ関連が22.5%、華道、書道、音楽、美術のような趣味的なものが19.8%。それにパソコン関連が続く。

生涯教育の形式・場所に関する問いでは、公的な講座・教室が33.1%、民間の講座・教室が29.3%。自分で29.3%、サークル活動26.8%、職場で22.6%、インターネット上が21.3%となる。



創造力 学びはまちづくり・まっつりはまちづくり - 7) 教育

b) ものづくり学校(A班)

背景

廃校となった小中学校校舎の活用、地場の工芸技術の後継問題、伝統工芸と現代のデザイン需要のかい離などを解決し、和歌山の持つものづくり力を発揮させる。

提案

地場の素材と技術を活かしながら、新進気鋭のクリエイターを招聘して指導に当たらせ、デザイン性や芸術性の高い作品を奨励し、新しい人材を育成する学校を設置する。既存の伝統技術や地場の素材を活かした新産業を育て、商業的な可能性を追求し、体験教室によって観光客の誘致を図るなど、複眼的な目的を持った管理を行う。

事例

世田谷ものづくり学校

「デザイン・建築・映像・食・アート・ファッション」など、さまざまな分野のクリエイターに教室を開放し、ワーキングスペースとして機能。

展示や撮影、イベントなどに使える「IID Gallery」、プレゼンテーションルーム、試写室、木工房、昔ながらの教室、多目的スタジオなど、時間貸しをしている。

また創業まもないクリエイターを支援する意味で、相場より低い家賃でオフィスやアトリエの定期借家を行う。学校が催す様々な活動を支援するという条件が付される。

毎週末に複数開催されるワークショップでは、子どもから大人までドローイング、ヨガ、ウクレレ、写真、フラワーアレンジメント、テキスタイル表現、石鹼作り、リボン織、ダンスなど、さまざまなクリエイティブ感性を喚起し、日々に彩りを与えるような新たな発見を促している。



創造力 学びはまちづくり・まっつりはまちづくり - 7) 教育

c) 中心部へひとを流す仕掛けとしての「学び」(C班)

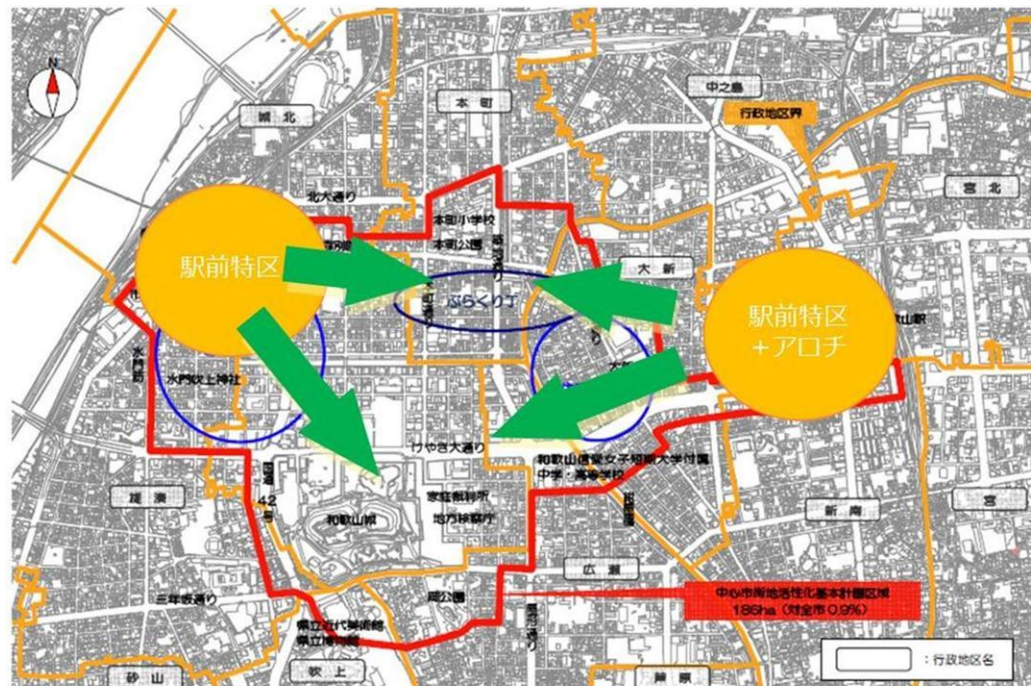
背景

さまざまな技術や知識を持っている経験豊かな人材に、その能力を披露してもらい他の人々に伝えてもらうことで、学ぶ人も教える人も心の充実によって豊かな生活を実現することができる。

提案

市民による市民のための講義の場を設ける。これにより駅前から中心部へひとの流れを作る。

- 市民の知恵や経験、主張をオープンな対話形式で学ぶ場を設ける
- 市民の「得意なこと」、「情熱を傾けていること」、などの共有を図る。
- 伝えたい、主張したい願望を満たすと同時に、そこでなければ体験できない充実感を感じさせるプログラムの充実を図る



出典元: 和歌山市中心市街地活性化計画



創造力 学びはまちづくり・まっしはまちづくり - 8) 芸術文化 →

創造力 学びはまちづくり・まつりはまちづくり - 8) 芸術文化

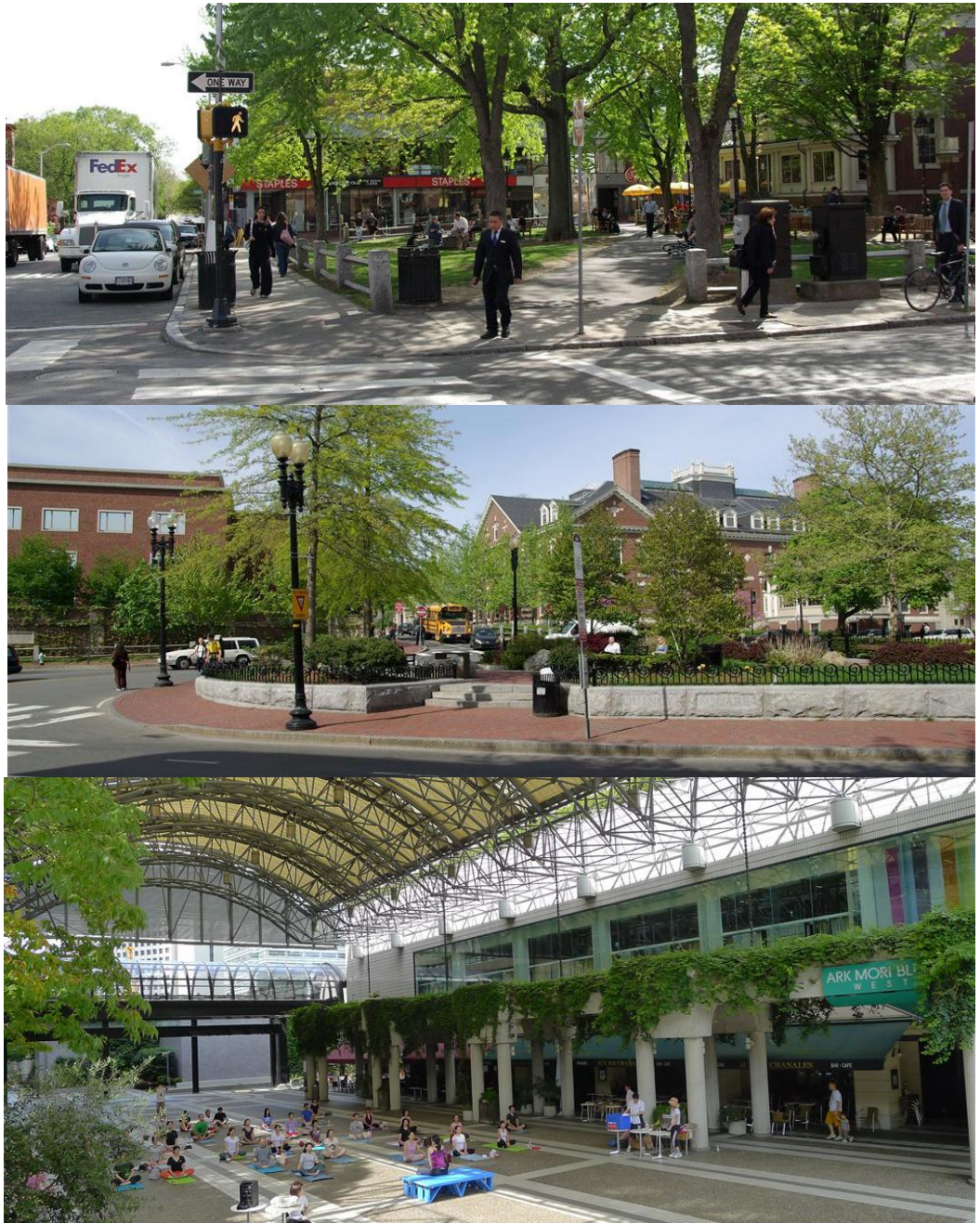
a) 芸術文化施設・緑地・イベントスペース・オープンカフェ(B班)

背景

中心部を歩いて楽しめるコンパクトなまちにするという前提の中で、芸術文化施設は、生活の質の面でニーズが高い。それと並列で楽しむまちの部品としてのオープンスペースは、イベント開催や各人の憩いに役立つ空間として必要である。

提案

芸術文化施設を整備し、周辺には、緑豊かなイベントスペースや、オープンカフェのあるパブリックスペースを設ける。



創造力 学びはまちづくり・まっつりはまちづくり - 8) 芸術文化

b) アトリエ・作業場の集積(C班)

背景

まちの魅力を向上させ、まちなかの商品の付加価値を高めるために、芸術家やデザイナーの力を借りて、駅前からまちなかに人の流れを作りたい。

提案

アトリエ・作業場を集積させた施設を作り、芸術家、デザイナー、建築家、草の根アーティストの活動と発表の場として利用してもらう。さらに作品の商業的な価値を高めて、まちの磁力として機能させる。



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 9) 広場・公園・パブリックスペース —————→

にぎわい・もうかるまちのアイデア - 9) 広場・公園・パブリックスペース

a) プロムナードー歩道の拡張と憩いの空間(A班)

背景

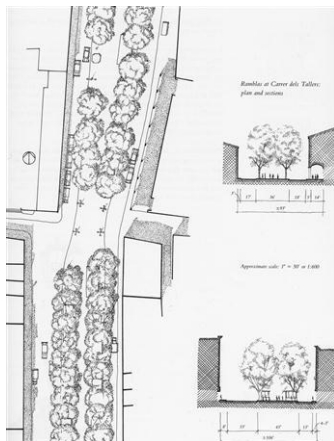
道路は都市内の移動・輸送・物流のルートとしてとらえることが多いが、同時に、特に歩道部分は、市民が、プライベートな住宅から出て、まちとの接点を持つパブリックスペースでもある。そのもっとも身近なパブリックスペースの質についてないがしろにされてきたが、コンパクトシティにおいては、生活の重要な部分を占める空間として見直す必要がある。

提案

イベントをやるためとか、安全な通行のためなどの一義的な用途のみならず、複合的な用途や景観に資する美的な環境など、総合的に考えられた歩道の形成を行う。

事例

バルセロナのランブラス大通りは、道の中央が幅広い歩道で、カフェ、花屋などのコンセクションがあり、常時そぞろ歩きを楽しむ住民や観光客であふれている。



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 9) 広場・公園・パブリックスペース

b) 緑地・イベントスペース・オープンカフェ(B班D班E班)

背景

和歌山には象徴的なパブリックスペース「和歌山城」が存在し、市民の大きな誇りになっている。しかし、和歌山の魅力の中心として活用できているか、まちの回遊導線において有効であるかはそれぞれの班から十分でないという提案がされている。和歌山城周辺および周辺の公園、緑地、けやき大通り沿いなどを単なる環境整備だけでなく市民の活動の場としてどのように活用できるかをあらかじめ考えたい。

提案

この後に述べられる広場・公園・パブリックスペースの整備にともない、その場の活用によって市民や来訪者のにぎわいを生み出す仕組みを展開する。それぞれイベントや回遊を促す仕組みでつなぎ、市民の日常的な憩いの場として開放、またはカフェやフリーマーケットなど地域のコミュニティを育てる場として活用するなど、まちづくりのソフトの展開場所として事業を形成

事例

ロサンゼルス近郊サンタモニカ・サードストリート



さびれたショッピングモールと、荒れたストリートをよみがえらせ、継続的ににぎわうエリアとしてよみがえらせた。事業性のある仕組みをもったまちづくり会社が責任を持ってストリートパフォーマーやカートショップ、フリーマーケット、セキュリティや清掃を企画コントロールし、にぎわいをよみがえらせた。



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 9) 広場・公園・パブリックスペース

c) けやき大通りを緑のオアシスに(B班)

背景

都市活動の密度を高くし、効率的で緑豊かな森のまちを目指す。食べ歩き、飲み歩き、そぞろ歩きが出来るような歩行者のまちを作りたい。2030年には自動車保有者が減少し、交通量も減少すると考えられる。であれば、道路を他の用途に転用することも考えられる。

提案

けやき大通りの交通は迂回させて、車線を廃止し、LRTなど公共交通の軌道の設置をするほかは、緑地帯とし、「木の国」和歌山の森のまちの景観を作る。

事例

ボストンのコモンウェルス・アヴェニューは、幅の広い大通りの内側を公園とし、ランドスケープアーキテクトによってデザインされた計画的なパークウェイ。1870年ごろに造成され、現在、この両側はボストンで最高級住宅街として認知されている。著名人の銅像が数多く置かれている。



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 9) 広場・公園・パブリックスペース

d) 市堀川周辺を親水型空間に(C班)

背景

和歌山は掘割に囲まれたまちであるが、周辺の建物は水面を裏側とみなして計画され、せっかくの遊歩道も利用時間制限があったり、防犯上不安な環境があったりして活用されていない。

提案

水面のある景色に価値を付加するため、親水型空間を周辺に整備して、そぞろ歩きが楽しいまちの一部とする。

事例

パリエヌ川河岸の即席ビーチ、ワインテイスティングの集まり、隅田川岸壁公園等



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 9) 広場・公園・パブリックスペース

e) 和歌山城に隣接する憩いの中心の形成(E班)

背景

和歌山の憩いの中心は、ランドマークでありまちの中心であるお城の近くに必要である。観光客もこの場で憩えるものになれば、周辺での消費活発化が見込める。さらに城北地区への回遊性を導く歩道専用道路とブリッジを設け、人の集まる拠点をつなぐことで面的な地区の魅力を向上させたい。

提案

伏虎中学校跡地を芝生が生い茂り、誰もが自由に入れ、イベントや特別催事の会場ともなる公園に再生する。さらに北側に歩行者専用通路と橋を作り、城北地区に回遊させ、城前とぶらくり丁、城北公園まで回遊ラインを形成する。



事例

写真上: ニューヨークブライアントパーク

写真下: ニューヨークセントラルパークタバーンオンザグリーン公園レストラン

にぎわい・もうかるまちのアイデア - 9) 広場・公園・パブリックスペース

f) 公園を核としたまちづくり(E班)

背景

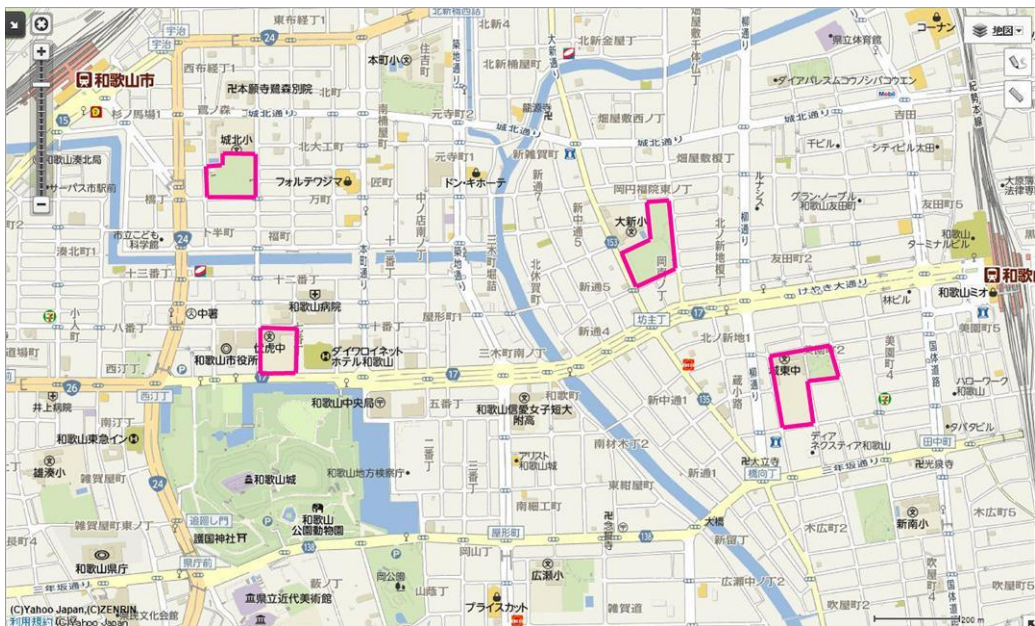
これまでのまちづくりがうまくいかない理由として既存商店街を中心に考えていたことが考えられる。商店街からはコミュニティがすでに消滅しており、民地での利害対立や個々の経済状況の問題により再開発が進まない。

今、質の高い暮らしに必要なのは、憩いの場所と孤独からの解放のための新たなコミュニティづくりの母体となるスペースであり、公園はまちに従属する付属物ではなく、コミュニティの核として位置づけをされるべき存在であるという発想の転換が必要。

提案

コミュニティの中心として絆を再生させる機能を持つ「市民公園」を形成する

- 誰もが気兼ねなく出入りできる開放的なスペース
- 日常使うコンビニのように、住民の多用なニーズを受け止める機能を持つ
- 憩いの緑地があることで、より潤いのある生活を志向する居住者が増加
- 災害時に逃げ込める場所としての整備・防災シェルター機能
- イベント開催や憩いの仕掛けと運営組織の整備
- 周辺商店街の発達と園内生鮮三品店舗群(公園市)
- 有料事業による運営の収益化によって経済的に持続可能にする
- 伏虎中学校跡、城北公園、大新公園、美園公園と城東中学校



事例

ニューヨーク、ブライアントパークは、民間のNPOがロックフェラー財団の支援を受けてドラッグディーラーの巣窟となって荒れていた公園の通路、植栽、トイレ、街灯などの修復を含めた再生を行い、周辺の地権者を巻き込んで公園の運営管理を行う。1992年4月の再開以来、レストラン二軒とコンセッション(運営委託)売店四軒を擁し、シティバンク、グーグル、エビアン、ニューヨークタイムズなどの冠スポンサーの寄付を活用したイ

イベントを開催して利益を上げている。現在はまちの中心として人々に愛され、晴れた日のランチタイムにはおよそ4,000人がここに集まっていると言われている。隣接の建物は、ニューヨーク市立図書館。



ブライアントパーク(続き)



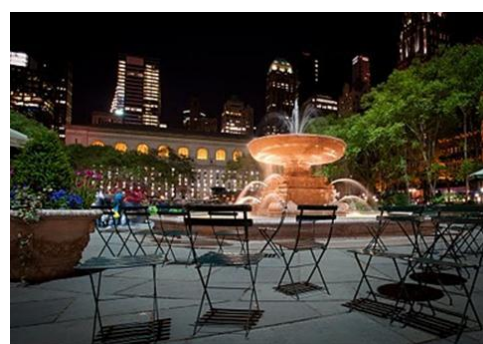
夏の風景

冬の風景(アイススケートリンク)



サッカーイベント

コンセッション売店



平面図

夕景

にぎわい・もうかるまちのアイデア - 10) 商業等産業 

にぎわい・もうかるまちのアイデア - 10) 商業等産業

- a) ものづくり学校で地元の食材・素材による独自の商品開発(A班)
- b) アトリエ・作業場の集積(C班)
- c) まちなかの地場産業工房村(E班)

背景

地場産業としての工芸品や名産品(食品)は、その地域の歴史や風土に由来する様々な特色をもつ。いわば独自のライフスタイルの表現ともいえるのだが、そのデザインや機能が現代に通用しないものが多いのも事実である。一方ルイ・ヴィトンにしろエルメスにしろ、元来ある地域のある時代で需要に対応した職人のクラフトであった。それらクラフトを使うライフスタイルに魅力を感じた世界中の人々がそれを購入している。和歌山のクラフトも、和歌山のライフスタイルが具現化されたものとして位置づけることが出来、その魅力をアピールすることが出来れば商品価値が高まるはずである。

提案

和歌山スタイルのクラフトを作って売る

- ものづくり学校、アトリエ、作業場、工房村など、人材育成の場を設ける
- 和歌山の地場の素材を使う
- 伝統的な工芸や食材の技術・レシピを基にする
- 現代に通用する機能・デザインを付加した高品質の商品開発
- 総合的なブランディングと販売戦略を確立する
- 製造と販売拠点をデザインし、市民公園周辺に立地、全市的広がりを作る
- 公園運営の収益を還元して賃借料を安く設定
- 製造工程の透明化、話題性確保、オーダーメイド対応等、現代の消費者のニーズに合わせた製造・販売方法を採用



フランスのブランド



フランスで再認識された南部鉄器



和歌山のブランド(瑞芝焼)

にぎわい・もうかるまちのアイデア - 10) 商業等産業

d) 駅前特区 - 2つの鉄道駅前に人を集める(C班)

背景

人口で劣る奈良市の鉄道駅の乗降人数と和歌山の二駅のそれを比較すると、和歌山が圧倒的に少ない。和歌山では鉄道利用者が少ないのは、駅前以外の目的地が多いせいではないかと思われる。コンパクトシティとして車の利用を減らすためには、駅前に賑わいを集中させる必要がある。

提案

駅前特区を設定して、規制、資金、広報、建築面での行政支援を行い、駅前にあってほしい機能を誘致する

- スタバ、ATM、スポーツ施設、シネマ、ベンチャー企業支援、オープンカフェ、夜店屋台、育児サービス施設、吉本ミニ劇場、和歌山ラーメン博物館、ミニ黒潮市場
- 行政支援: 駅前企画の支援、名産品に対する資金支援、テレビや新聞の広告掲載補助、建蔽率緩和、新築に対する固定資産税減免措置など



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 10) 商業等産業

e) 駅前発ぶらくり丁構想 - 駅前から中心街に人を流す(C班)

背景

駅前に商業活動や利便性を集中させて人を集め、それを中心部に流し込むという考え方のもと、まちなかに人が出かけるための「まちの磁力」を高める

提案

歩きやすいまちの構造に変え、中心部にアトリエや作業場を集積させて芸術品や建築の創作を奨励し、市民が市民に教えるような知恵が一つに集まる場所を作る。これにより、まちなかに人の流れが戻り、まちなかの商品価値が向上する。



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 10) 商業等産業

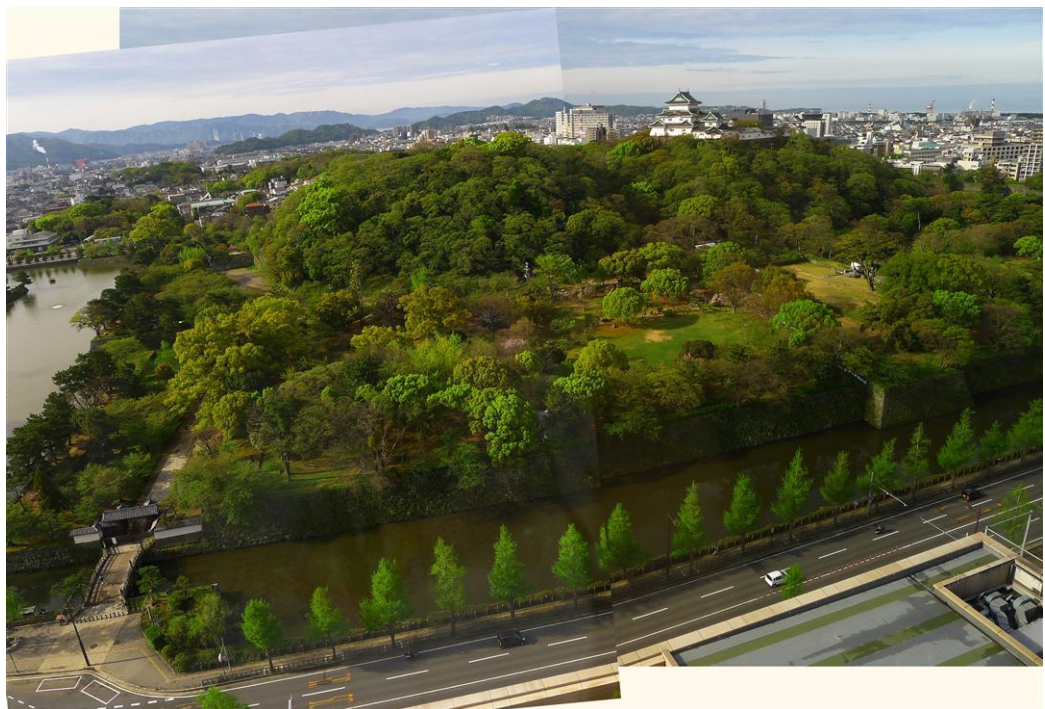
f) 市民出店用スペースの設置 - 大和歌山城構想(D班)

背景

賑わいは＝人が動くことで生まれるので、外に出て動くような仕組みや仕掛けが必要。

提案

まちなかの賑わいの中心を和歌山城およびその周辺に設定し、市民が出店等出来るスペースを確保し、「大和歌山城」を形成する



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 10) 商業等産業

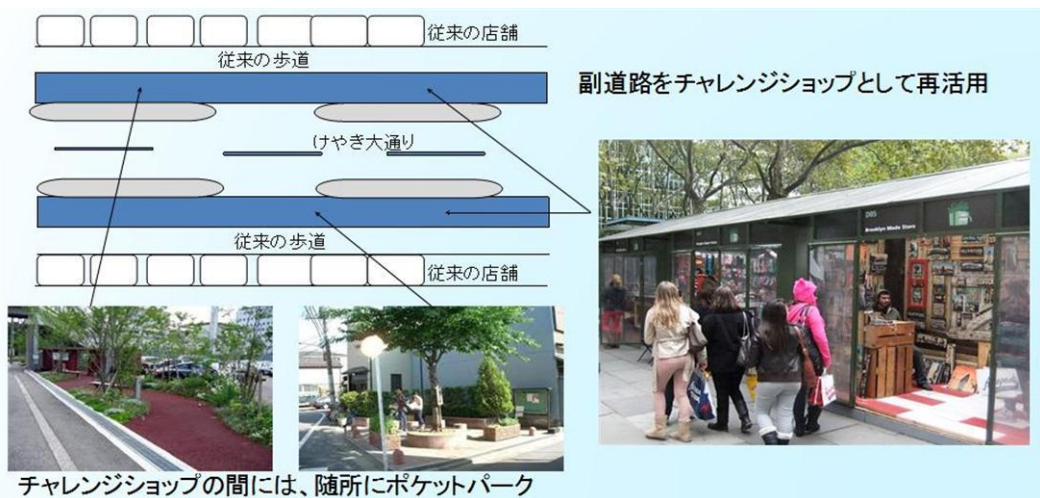
g) けやき大通りの整備 - 副路側帯の活用と利用(E班)

背景

けやき大通りを和歌山の表玄関とし、観客も地元住民もぶらぶら歩いて楽しい賑わいにしたい。起業したい商業者を集めて、活気を作りたい。

提案

副路側帯を廃止し、チャレンジショップを設置して若いチャレンジ精神を持った事業主を支援。従来の歩道の両側に店舗が出来、ところどころに設置するポケットパークと共に、潤いと楽しみ、ゆったり感のあるまちなみを形成する



にぎわい・もうかるまちのアイデア - 10) 商業等産業

h) 市民公園周辺の商業(E班)

背景

コミュニティの中心として位置付けられる新しい形の市民公園が出来ると、日々の暮らしの行動パターンがその周辺に集められる。そこには自然な形で商業機会が発生する。

提案

市民公園の運営会社の収益源として、公園内のコンセッションを活用する。周辺には民間努力で自然発生的に商業が生まれ、公園内と合わせた協力体制でエリアマネジメントを行う。

- 憩いの中心である市民公園に住民が集まり、喫茶店やクレープ屋などの商業が自然に戻る
- 公園から商店街、主要道路に通じる動線を整備し、飲食店、小売店、サービスの出店を活発化させる
- 「公園に安らぎに行くついでに日々の買い物を」 生鮮産品店舗を誘致し、憩いに食の要素を付加する

